第16回「文芸思潮」エッセイ賞 中間発表 一次・二次・三次予選

●第16回「文芸思潮」エッセイ賞に御応募いただき、まことにありがとうございました。おかげさまで、日本全国および海外から総数三四四編の作品をお寄せいただきました。心から御礼申し上げます。去る三月末日に締め切らせていただき、厳正な一次・二次・三次予選審査を行ないました。その結果を謹んでここに発表させていただきます。

無印は一次予選通過者、○印は二次予選通過者、◎印は三次予選通過者です。

■北海道

○「思い出」　栗山佳子
◎「最後に見えるもの」　鎌田　誠
○「じいちゃんの呟き」鎌田あい子
◎「母の電話帳」　斉藤はな絵
○「電話とわたし」　髙橋陽子
◎「人の心、花の心―ハイビスカスに想う」　藤嶋かをり
「日帰り入浴の女」　広瀬由実
◎「姉の様子」　柴田節子
○「電気毛布の匂い」　三浦みん
◎「先生と過ごした時間」青地久恵
◎「AI時代の『勘ピューター』」　内海健一
◎「受者の眺め」　中村郁恵
「お引っ越しのトリセツ」深雪朔
◎「古里の記憶」　葩島彊子
◎「迷路からの脱出」　高岡啓次郎
◎「タクシー」　広瀬美月
◎「統合失調症と診断されて」　辻村　明

■青森県

○「杉田水脈擁護論」　松橋倫久
◎「寮生登山」　金田一淳
「従妹和子」　吉田章子

■岩手県

◎「統合失調症と金の苦しみ」原氷
◎「まぶしい魚」　中村行寿

■宮城県

◎「旅の人」　吉田宏子

■秋田県

◎「大家と私」　菅野晴子

■山形県

◎「あの子の記録」　令木　千
◎「敗者復活戦」　小笠原新

■福島県

◎「大震災、癒えぬ心の傷」　佐藤義弘
◎「ドルジェよ、生きているか⁉」　西島雅博
◎「アナキズムとの出会い」　高橋力也

■茨城県

◎「ボランティア」　友　修二
○「臨死体験もどき」　雲谷斎
「人を励ますことについて」　吉田尚史
○「ジャンケンバトルの想い出　僕の給食必要論」　菅原宗義
「読書に関しての一所感」泰良渉
○「生き方を探して」　上野　達
○「自転車盗難と信太の森の狐」　八代　穣
○「習字の先生」　桜山育子

■栃木県

◎「老いの独り言」　内山　正
◎「幸い日和」　菅　幸世
◎「学校祭狂詩曲」　山田吉生

■群馬県

◎「緊張しいの女の子」　楠カエデ
○「骨折したはなし」　ぐんよし
◎「ジャーマン・シェパードと私」　村松佐保

■埼玉県

「夫婦愛とは?」　千葉鳴り子
◎「長いぞ、オットセイ将軍」　司馬久護
◎「失敗のパイのパイ―駆け出し編集者顛末記」　大島直次
◎「使いたいクリエイターはここが違う」　三日月李衣
◎「四十年後の未来」　南條美起子
◎「記憶を失った君からもらった異常な愛情」　佐藤真規
「ふるさとものがたり」四季寛子
◎「バラと共に生きる」峰岸正弘
「大病院のメルフェン」春次哲介
◎「マホという猫のように」　甕左之助
○「切れた糸」　神田春佳
○「旅の空から」　齋藤小夏
○「美術館の警備員と芸術について」　松山尚紀
◎「愛おしい日々」　ななきざまし
○「カホ」　サリエリ
◎「一念天に通ず」　風間麗子

■千葉県

◎「逆風のかなたに聞く　平和の水音」　平野靖雄
◎「絵を描くような楽しさと、ユーモアを」　あおい満月
◎「それぞれのたわごと」　ナガッチョ
「コロナ禍で『死』がよぎってしまったら」　森　惇
◎「感謝の一品」　古城　正
◎「みなしご『ミトタン』」山水文絵
◎「九か月間の友人」　和賀清流
○「祖母のお経」　飯塚加津子
◎「四ヶ月の休職中に感じたこと」　みけにゃん
◎「久保木おばあさんの最初で最後の授業」　椎名加奈子
○「自閉症の次男との日々」　大野みか
○「人生は翠霞」　加瀬朝輝
◎「瞬きのうらおもて」本間直也
「魅力ある手話通訳制度にするために」　横山典子
◎「祖父と私」　藤野杏奈
◎「声を上げよう」　下村きよ子

■東京都

◎「巣立ち雛の青春　燃え尽きる迄」　大石智章
「高校球史に輝く名勝負」黒岡實
◎「わがシラバスの花ひらく」　本間　浩
◎「独りよがりの絵ごころ」大井理
○「性格の異なる二つの社会」　原　勇二
◎「チェーホフの『おじいさん』のように」　牧　康子
○「人生をぶんまわす」　栗ボラリーナ
◎「2日間しか生きられなかった僕のおじさんの名前」　Paody
○「掌」　武山　栄
○「冒険の旅」　茶売君枝
「母への詫び状」　阪本いわき
○「死んでしまった恋人」東のぶこ
◎「花の散り方」　九条之子
◎「ボイラーメンテ」　anehako
○「スカーレットの星の女」　河上美智子
◎「ある夏の体験」　平本節子
「愛犬の想出」　竹内希三子
「父の映写機・白黒フィルム」　癸　智恵
◎「ママ友」　朝比奈優
◎「カメが生き延びたのは」　野宮健司
◎「遺言メモ」　マツイアキラ
◎「保護犬との出会い」大谷重司
◎「老いを生きる術」　小池光一
◎「トリアージ≒自己犠牲」　佐生綾子
○「鳥の目になって、見てみたい」　小西宏明
「なわとび」　いはらえきこ
◎「ぐうぱあとぐうまあのこと」　茂木　彩
○「言わずに死んでなるものか！いち保健師の『こわーい』話」　中島くれば
◎「母と雀」　丘田ミイ子
◎「朝の光が待てなくて」　オノカオル
◎「校庭のエメラルド」　七森侑佳
◎「いとおしい朝時間」ayuko
○「独身も人間なんです」篠路　進
◎「そんな馬鹿なぁ」　ぺぺもんチーの
◎「脳内討論会」　花房
◎「無駄の効用」　宮崎博之
◎「翡翠」　菊見洋介
「美しき消滅危惧言語をとらえ直す」　中川　夜
◎「コロナ闇物語」　竹中水前
「失われた一年」　村上泰範
◎「算数の教え方」　前岡光明
◎「二つの星」　沓掛理美
◎「戦争で死ななかったお父さん」　乙坂和朗
「思春期と歩む」　かいこ。
◎「昭和が生んだ、なかにし礼」　弟子丸博道
「生きる営み」　伊藤日奈子
◎「修学旅行」　山岡竜弘
◎「気まぐれな指先」　角　朋美
◎「わたしの話」　ちたん
◎「洋服病院の洗濯物は、いつ見ても朗らかだった。」　五六八我楽
◎「ヨロンと私とモリ・ヨーコ」　秋里洋子

■神奈川県

◎「海」　寛
◎「現代の危機」　楽　加生
◎「かつての家族」　浜　葉子
○「いそげ！マーリンケ」吉田浩二
◎「そんな時期もある」重　加山こずえ
「心のカタチ」　金田　薫
◎「コロナ禍　仲間たちへの想い」　ゴルビー長田
◎「声なき声」　村上令一
「再会」　後藤真樹
◎「六八歳の引っ越し」　劉秀
◎「『言葉の偽薬』と嘘」　伊予蜜柑
「あの世の人間関係」　雪村
「ライムグリーンの贈り物」　中丘美庭
○「際限なき日韓問題」風早　爽
○「源さん」　小倉一純
◎「左の蝶々と別れを告げた話」　井口海斗
◎「喪」　弟子供を産みにくい国」東屋半里

○「生まれてきてよかったのか」　堀田素生
◎「18歳からみた警官」　ジョン・スミス
「原発とコロナと政治と子育て」　Mommo
◎「人生百年というけれど」　横井純子
◎「お母さんと呼ばれた日」小山咲
◎「千夜を超えて」　成就志朗
○「愛とかなんとか言うけれど」　めちこ
◎「ピアノが綴る人生」南風摩耶
「方向音痴の冒険とおじいちゃん」　絹月さや
○「格安を愛し、〝わびさび〟を伴侶に」　宮崎椋成
◎「ネヴァの流れの先に」蒼井　和
◎「母の書道」　池田茂夫
○「面影」　風葉　凪
◎「二度目の中学校で学んだこと」　安納煮芋
◎「この頃の人生観」　入江太一
◎「初夏の窓の外」　村山政子
◎「祖父と私と新聞と」藤田陽子
◎「色彩が浮かび上がるとき」　松原泰子

■新潟県
「東日本大震災10年に思う」　柳川　隆
○「楽しき哉負けたり勝ったり」　相馬　晃
◎「我が家のロン」　結城孝子

■富山県
○「大雪に想う」　村山英明
◎「太平洋を越えて」　早月春美
◎「生と死」　有澤かおり

■石川県
○「小松左京はSF作家か？」　酒井恵三

■福井県
◎「父」　近藤幹夫
「欲の末にあるものは」Yun Rita

■山梨県
◎「血」　田中浩司
◎「母の死と魔の十一時」倉沢辰子
◎「脳裏にこびり付いている人」　佐高　源
○「血と肉と言葉と」　鹿戸あゆみ

■長野県
◎「ひきこもごもの愛しき軌跡」　音葉紬
○「天使たちはお手紙を書いていた」　山家衛艮
◎「ちいさな認定証」　渡辺　勝
○「母への想い」　Kamibin
○「二輪旅」　西原雄二
◎「母のクーポン計画」　仲田恵利花
「かわいい宇宙人」　北條恵美

■岐阜県
「百歳までの約束」　平岡佐一郎
○「自由を捨てたメジロ」　秋葉みのり

■静岡県
◎「人の悩み」　梅田慶一
「憤怒の行方」　若林　茂
◎「カメムシ」　まるもっこり
◎「ゴン」　馬込太郎
◎「より添い猫と歩む明日」　春木美子
◎「百歳に乾杯」　木下富砂子

■愛知県
「現状に気づいて」　兼松健太郎
「バス・ストップ」　七里彰人
◎「ゴビの恋模様」　菱川町子
◎「死に神様」　宮尾美明
○「皆既日食は人生観を変える、という奴もいる。たぶんそれは本当だ。」　ひとくちギョウザ
○「卒婚」　工藤ともみ
◎「私の好きな色」　早藤青里
「今を悔いなく生きる」加藤元気
○「米国小学校に通う娘から学ぶ」　谷　美智彦
「派遣だって叫びたい！」　中村あや子
「私の自己（教育）改革」　Satoris
◎「書店とは」　高倉麻耶
○「父の最期」　北乃はるか
◎「二階から目薬」　天城轟一
「元気な高齢者になるには」　ヌック
◎「56歳からのアプリ婚活」　磯部浩子
◎「永遠病」　さやか

■三重県
◎「神様が与えて下さった仕事」　岩谷隆司
◎「ヨーロッパドタバタ記」　伊野隆子
「つながりのとき」　伊藤範子
「父が教えてくれたこと」　はたのなおり
◎「南の島のムラサキシキブ」　末永卓幸
○「命の水」　まあこママ
◎「『個性』という言葉の魔力」　蒼　朔空
◎「そのプラスチック、必要ですか？」　花津絵美

■滋賀県
◎「青木の小母ちゃん」田中恵子
◎「仮の宿」　高田智子
◎「それはキシュウローレル号に始まった」　龍野　健

■京都府
◎「悲しみの先に」　春宮流水
◎「五万回斬られた男・福本清三への頌歌」　松宮信男

◎「三毛猫母さんの話」大沢悠馬
○「進化について解らないなりに考えてみた件」　池乃　大
○「私の足どり」　宇治のやんちゃ坊主
○「いまだいちばん幸せ」松田正弘
◎「店長」　植田郁子
◎「就活動画を撮った話」　雨女
◎「夕火」　森　瑞帆
◎「怪人二十面相と鉄人28号」　大幸信明
○「ルーツの地への想い」七星慶洋
◎「膀胱と私」　猪熊チヨ
◎「『自点自服の茶』を楽しむ」　林　須磨

■大阪府
◎「私のランニング人生」　きひつかみ
○「軌跡より奇跡」　二村拓也
○「魔法をかけますよー」八木宇美
◎「島津の残滓」　今井　満
「でこぼこ道」　池永伸二
◎「元安川の石」　たなかみはる
○「お酒の沼にハマる」桃乃かし子
◎「時を超えた沈黙」　長井　潔
○「ノスタルジック・ワールド」　鈴木　真
○「婚礼写真」　ブン・ブンコ
「あれからどうなったって」　ひかり
「18歳の時点で、私は人間ではなかった」　プラネットジャパン
「Fさんへ」　晄さか雲水
○「孫の雛人形」　青空肚実
◎「聖山に登るべからず」森崎律子
◎「新聞、見たよ！」　石田真一
◎「写真屋の息子」湯の峰フミコ
◎「ウイグル人の証言をきいて」　山田まさ子

■兵庫県
◎「コンコルド効果」　佐藤陽平
「いろはかるた―三歳児とことわざ」　朝川　渡
◎「穴」　山田栞里
◎「野菜」　玉置順三
◎「アンティークショップで『写し』を想う」　あっちゃん
◎「ビジン語とクレオールそして外国語学習」　蔦原道久
「他人から知る、知らなかった自分へ」　きはる
◎「トゥーマッチペイン」七瀬柚子

■奈良県
◎「母の覚悟」　竹山元一
◎「戴冠詩人」　杏藤　伶
◎「サヌールの犬」　奈良　元
◎「花の名前」　中牟田智子
◎「子育て終了日記」　冬野　星
◎「諸行輪廻の響きあり」原　護一

■和歌山県
◎「雪解けの大地に咲く花のように」　たかぎちほ

■島根県
◎「跳べ！　キキ！」　磯野　桜

■岡山県
○「2年目のシクラメン」　和緒
◎「泥んこの金メダル」那岐エコウ
「神様は必ずいます～なんでうつ病になってしまったのか」岩崎彷徨

■広島県
○「終戦後の私」　伊藤秀輔
◎「悠久の大地　ハルピン」　苑田有子
「山があるから」　もりあきこ
◎「ある年の春のこと」　すみれ
○「ソウルメイト」　佐々木晴香
「ある日の我が家」　石橋いづみ
◎「わからない本」　J・ナカノ

■山口県
○「三丁目の夕日　津和野物語」　村田和子
「君と読みたい二十一冊ノート」　小川俊数

■徳島県
○「トンボのめがね」　富登千恵子
◎「夜のしじまの中で」　熊谷和代

■香川県
「無気力高校生たちが起こした奇跡」　すぎむらみずほ
「アンパンマン電車に乗って」　卯目チヱ子
◎「祖父の源流をたどる」　堂もマルク
◎「消息」　寒川靖子

■愛媛県
◎「Eじゃなくてもじゃないか」　比戸　圭

■高知県
◎「青年と海とイワシ」　笠原英二

■福岡県
◎「今がある―癌治療を終えて―」　田浦チサ子
「後悔」　村田裕子
◎「昭和からのはがき」　安部としき
「ペットと暮らして」　りう
「箱崎日記」　柳風亭清三
◎「父の温もり」　武中　彩
◎「未来へのパスポート」森千恵子
◎「恩師の形見」　西尾　吉
○「荒涼の空」　牧　定郎
◎「イノシシ村から」　重松博昭
「Back to Life」　荒木景子
◎「三つで千円」　もりのみどり
○「ラバーカップ・ラプソディ」　小海茉由
「本当に必要な物は何？」　まいゆき
「ゴリラとのアンチエイジング奇譚」　三原三中
◎「聞く力について考える」すずらん

◎「赤ちゃんは真実を知っていた。」　Asako
○「右手発見」　屋代彰子

■佐賀県
「盲人卓球（サラウンドテーブルテニス）」　東家芳寛
○「息子の絵」　那須修一
◎「古稀の社交ダンス」　堤　万里子
◎「さよなら、スリッパ」　末永直治
◎「鬱からの旅立ち」　安楽和人

■長崎県
◎「途上にて」　西村徹也
◎「昔……あの行進曲があった」　足達重子

■熊本県
「オヤジの涙」　宮川行志
「還暦」　吉尾令子
○「邂逅と海溝のはざまで」　温波オスカル
◎「こぶ」　舞まどか

■大分県
◎「たどりつけなかったものたち」　長野ひろし
◎「ミツバチと新ちゃんの病気」　西山淑子

■宮崎県
◎「終い湯の常連客と一見客」　中武　寛
「良きに計らい、生きやすさはあきらめた」　日出　柊
◎「男の隠れ家」　下野昌代

■鹿児島県
◎「ウンチバトル」　岩下清里
「魔女の子育て」　笹気冷菓
◎「桜」　内田智久
「乳歯」　後神光希

■沖縄県
○「前略、何とか生きてます」　嘉数特急

■海外
○「お元気ですか」　織本一十未
○「父とわたしと事件の顛末」　伊藤なにか

広告承ります

文芸思潮の読者に　文学愛好者に
知らせたい情報を掲載します

広告掲載料　　文芸思潮●発行部数 1000 部

1P	4 万円		
1／2P	2 万円		
1／4P	1 万円	1／6P	7000 円
表 4 カラー	12 万円		
表 2・表 4	8 万円		

その他御相談に応じます。ご連絡ください。

文芸思潮広告部　☎ 03-5706-7847　mail: bungeisc@asiawave.co.jp

エッセイ賞応募者の皆様へ　第一次・第二次・第三次の選考基準について

●第16回「文芸思潮」エッセイ賞への御応募まことにありがとうございました。第一次・第二次・第三次選考について選考委員会より付記させていただきます。

第一次の選考基準は、他者に対して伝わる文章になっているかどうかが最重要の基準点です。しかし書く姿勢も加味させていただきました。少し文章が粗くても、他者に訴えたい切実なものが感じられる作品は一次を通過しています。また逆に文章は整っていても、書く姿勢に曖昧なもの、書く必然性が希薄なもの、中途半端なものは落とさせていただきました。この二点をクリアしたものが一次予選通過者です。何％とか、何篇以内とか、数字の枠はありません。したがって、応募者全員が一次予選合格ということもあり得ます。

また第二次予選は、その中でさらに強く何かが感じられるもの、光るものが選ばれます。何かが読み手の中に残っている作品ということになります。内容でもいいですし、文章でもいい、一行でもいい、一人の人物でもいい、見方でもいい、何か一つ心に残るようなものがあると、上に拾い上げたくなるという、一つの魅力を持っているかどうかがポイントになります。

第三次予選は、よりたくさんの人に読んでほしくなるような普遍的な力を備えているかが、選考の基準になります。第三次予選まで通過した作品は、だいたい雑誌に載ってもいい、人に読んでもらっても何か訴える力を備えていて、読んだ人の心に何かが残って新たな力になるような作品です。

「文芸思潮」選考委員会では、選考の便宜性を重視して作品数によって制限するのではなく、作品の内容を重視して、優れた作品がたくさんあれば、できるだけその作品の価値やレベルによって、作品を残すよう心がけています。したがって、場合によってはたくさんの作品が三次予選、さらにその上に選出される可能性もあります。

今年第16回も三次予選通過者が多く、応募作品全体の水準が上がっていることを実感しております。

もっと詳しく御自分の作品への感想・批評がお聞きになりたい方は、作品個別の「批評コメント」もご利用いただけます。どうぞ御希望をお送り下さい。

（「文芸思潮」エッセイ賞選考委員会）

小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

小説の書き方
――作家を志す人のために――
五十嵐　勉

税込 1000 円　御注文はアジア文化社まで